

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02025

研究課題名（和文）大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容

研究課題名（英文）The Formation and Transformation of the Ideal Human Image in the New Urban Middle Class of the Taisho and Early Showa Periods

研究代表者

竹内 里欧（Takeuchi, Rio）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：40566395

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：申請研究では、「大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容」というテーマについて、社会学的分析を行った。近代日本の都市新中間層は、当時の人口に占める割合は低いものの、生活様式の面でも価値観の面でも、戦後の中間層文化の原型をなした層で、現代にいたる日本社会に大きな影響を与えた。近代日本の都市新中間層の文化や価値観、「理想的人間像」のイメージ、という細かなディテールを考察するために、大正・昭和初期都市新中間層の日常生活を舞台にした小説で人気を博した佐々木邦の作品と読者層の分析を行った。分析の結果、都市新中間層の価値観や文化における重層的な様相が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、既存の新中間層文化にかんする研究をふまえつつ、佐々木邦の作品と読者層という具体的事例をもとにすることにより、当時勃興しつつあった都市新中間層文化の具体的な様相、また、そのもつけん引力や反発について把握できた。こうした研究は、既存の「都市新中間層文化にかんする量的・質的研究をふまえつつ、それらの不足を補うものである。また、このような研究（近代日本社会における「文明的」な理想的人間像の形成・変容）から、civilized fairといった近代の重要な価値観を周辺地域がどのように受容・変容してきたか、それらは比較社会学的にどのような特徴があるか、ということについても示唆を得られた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed the theme of the formation and transformation of the ideal human image in the urban new middle class of the Taisho and early Showa periods from a sociological perspective. Although the new urban middle class in modern Japan accounted for only a small percentage of the population at the time, they have had a significant impact on Japanese society up to the present day. This is because they were the prototype of postwar middle-class culture, both in terms of lifestyle and values. The purpose of this study is to examine the culture and values of the new urban middle class in modern Japan. For this purpose, I referred to the works of Kuni Sasaki, a popular novelist of the time. He was popular for his novels depicting the daily life of the new urban middle class in the Taisho and early Showa periods. The analysis revealed that the values and culture of the new urban middle class at that time were not monolithic but multilayered.

研究分野：文化社会学、教育社会学、比較文化

キーワード：都市新中間層 子ども 家族 文明化 理想的人間像 佐々木邦

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、「大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容」というテーマについて、社会学的分析を行った。従来、「文明化」を象徴する理想的人間像の形成がどのように行われたかというテーマにかんする先行研究においては、知識人やエリート、ハイ・カルチャーに分析が偏りがちであった。それらの先行研究の意義をみとめつつも、本研究は、中間層、とりわけ、大正・昭和初期都市新中間層の文化に着目した。なぜならば、大正・昭和初期の都市新中間層は、戦後日本社会から現在に至る社会における生活様式や価値観、文化の原型を形成するにあたって重要な役割を担ったからである。現在の家庭や教育にかんする自明とされがちな価値観や規範も、この時期の中間層において原型をたどることができる。そうしたことから、大正・昭和初期都市新中間層に着目し、新中間層の文化のディテールやそれへの憧れ・反発について分析することや、「文明的」な理想的人間像の形成・変容がどのように起こったのかを分析することに大きな意義があると考えられた。特に、大衆的な人気作家であり、モダンで西洋的な新中間層の日常生活を描き広く親しまれた佐々木の作品を分析することにより、理想化された新中間層文化のあり方や人間像のディテール、そして、新中間層文化への憧れ・反発の様相をつぶさに知ることができる。そうしたことから、申請研究では、目的を「大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容」と定め、具体的分析として、大正昭和初期に人気を集めた佐々木邦の小説や読者層をとりあげた。本研究の目的は、近代日本の都市新中間層において、「文明的」な理想的人間像がどのように形成され変容していったかを明らかにする、というものであった。また、今回の研究は、近代日本社会に焦点をあてたものであるが、それに関連して、「文明」を象徴する理想的人間像がどのように形成・受容されていったかというテーマは、civilized, fair といった価値観の受容・変容という、グローバルな文脈でも重要なトピックである。そのため、グローバルな文脈での比較検討も必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、近代日本の都市新中間層において、西洋的な価値観や文化、ライフスタイルの流布、そして「文明的」な理想像の構築・変容がいかに起こったかについて考察することを目的とした。そのため、「文明的」な理想的人間像の構築・普及にあたって重要な役割を担った佐々木邦の作品と読者層に注目した。大正期頃より台頭した都市新中間層は、当時の人口に占める割合は低いものの、彼らの文化や価値観は、戦後の拡大・大衆化した中間層文化の原型となるものであり、その分析は重要である。本研究では、既存の新中間層文化にかんする研究をふまえて、佐々木邦の作品と読者層という具体的事例をもとにすることにより、当時勃興しつつあった都市新中間層文化(およびそれへの憧れ・反発)の具体的な様相、また彼らの内面や感受性のあり方のディテールを把握することを目的とした。大正・昭和初期都市新中間層の文化を把握する際には、特に、「近代家族の台頭」と「高等教育の普及・影響」という2つの側面に注目して分析を行った。「近代家族の台頭」にかんしては、新中間層家庭を土壌として台頭した新しい家族観について注目しつつ、考察を行った。特に、実態とは別にどのようにイメージされどのように受容されていったのかということに注目した。「高等教育の普及・影響」については、佐々木自身の教育歴や高等教育の普及による読者層の拡大について注目しつつ、考察を行った。特に、佐々木の形成した理想的人間像のイメージについて、ミッションスクール文化の中ではなくまれた理想像との関連について注目した。

3. 研究の方法

本研究は、「大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容」というテーマについて、社会学的分析を行うことを目的とした。特に、大正・昭和初期都市新中間層の文化を把握する際には、「近代家族の台頭」と「高等教育の普及・影響」という2つの側面に注目して分析を行うこととした。研究期間内には、具体的に以下の4つの作業が行われた。

(1) 「文明化」にかんする研究の理論的整理・検討

エリアス、ケミライネンなど、「文明化」にかんする研究を中心に先行研究の精読、理論軸の設定を行った。具体的には、フィンランドのナショナリズム研究者による、周辺地域における「文明化」された理想像構築のプロセスの分析を着眼点や手法ともに参照し、学会発表(竹内里欧「フィンランドのナショナリズム研究者アイラ・ケミライネン『参入』をめぐるディレンマ」第73回関西社会学会大会、2022年5月28日)としても結実した。「文明化」において周辺に位置する地域において、「文明的」な理想像がナショナリズムとからみあいどのように形成されるか、というテーマについて、理論的・実証的側面から考察し、本研究の問題関心を明確に定めるために整理・検討した。

(2) 大正・昭和初期都市新中間層の生活実態や家庭文化の把握。家族像や子供像の通時的変容についての分析

都市新中間層について、既存の先行研究や具体的資料(『少年倶楽部』『主婦之友』『明朗』などの雑誌記事、各種統計資料、学校史、住宅構造にかんする資料等)をもとに、検討を行った。これは、「(3) 佐々木邦の作品と読者層にかんする分析」を行う準備ともなった。また、一方で、フィクションにおける家族像や子供像の通時的変化に着目した分析等も行った。論文(竹内里欧「第18講 朝ドラ 主婦層を支えたビルドゥングスロマン」『昭和史講義【戦後文化篇】(下)』(筒井清忠編、2022、筑摩書房)などに結実した。

(3) 佐々木邦の作品と読者層にかんする分析

都市新中間層文化について、具体的に、佐々木の作品と読者層を分析した。研究の初期の頃、明治学院大学等に所蔵されている佐々木関係資料について予備調査を行い、スタッフの方ともやりとりをし出張計画をたてていた。しかし、コロナ感染拡大のため、移動が難しくなってしまった。また、小さい子供の育児中であり、休校などの影響や諸々の事情により学童利用制限していた影響により、授業をするのがせいっぱいで研究活動を行うのが厳しい時期があった。現在は、コロナ感染がかなりおちついたので、今後、今回コロナ禍で行うのが難しかった作業もしていきたいと思っている。感染拡大期は、なかなか移動ができないため、インターネット上のデータベースなどを活用し、所蔵確認・資料収集を行い、また、オンラインでの研究会に参加し研究についてコメントをもらう機会をつくるよう努力した。論文(竹内里欧「都市新中間層文化の生成と佐々木邦『私民』の『市民』化の可能性」『『日本型』教育支援モデルの可能性(仮)』(高山敬太編、2023年日本語と英語にて刊行予定))などに結実した。

(4) 研究成果について比較の視点からの再検討

「大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容」という研究テーマについて、比較の視点から再検討を試みている。具体的には、論文について日英語での出版計画があり比較検討を考えている。また、日本の教育文化を比較の視点から検討する研究会(「日本型教育の文明史的位相」日文研研究会等)に参加し、考察を深めた。

4. 研究成果

研究成果について、以下、(1)(2)(3)(4)に整理する。重要な成果を中心に触れる。

(1) 新中間層文化の分析に関連して

論文 竹内里欧「第2章 佐々木邦と『ユーモア小説』 都市新中間層のハピトゥスと『抵抗』戦術」
(『教職教養講座第12巻 社会と教育』稲垣恭子・岩井八郎・佐藤卓己編著、2018、協同出版、23-41頁)

この論文においては、佐々木邦の代表的作品を紹介しつつ、佐々木邦の描く都市新中間層について分析を試みた。特に、佐々木の描く都市新中間層家庭の、日常生活の描写に含まれる『抵抗』に着目し、セルトーの理論などを援用しつつ分析を行った。

学会発表 竹内里欧「『私民』の『市民』化 佐々木邦の諸作品から」第93回日本社会学会大会、
2020年10月31日

この学会発表では、都市新中間層の在り方のモデルのもった意味について検討することを目的とした。

論文 竹内里欧「都市新中間層文化の生成と佐々木邦 『私民』の『市民』化の可能性」(『『日本型』教育支援モデルの可能性(仮題)』高山敬太編、2023年日・英語にて出版予定、原稿提出済み)

この論文では、佐々木の提示する新中間層モデルが重層的な構造をもっていることを示した。また、日本語英語で出版することにより、グローバルな文脈での比較検討をも視野に入れている。

これらの他、研究会等での報告やディスカッションなども行ってきた。これらの研究活動により、都市新中間層文化にかんする描写の具体的ディテール(およびそれへの憧れ・反発)についてつづさに把握することが可能となり、新中間層文化のありかたについて、立体的に分析することが可能となった。

(2) 「文明化」、近代化、ナショナリズムなどの理論検討に関連して

国際講演会における討論者(『Making Tea, Making Japan』(クリステン・スーラック博士による講演)のパネル・ディスカッションにおける 討論者、於京都大学、2018年11月1日)

クリステン・スーラック博士による著書にかんする講演においてパネリストをつとめた。ナショナリズム、オリエンタリズムの観点からコメントをし、考察を深めることができた。

国際講演会企画・司会・討論(『Current Globalized Society and Nationalism』(ペッカ・コルホネン博士による講演)の討論者兼司会(英語)、於京都大学、2019年2月16日)

ペッカ・コルホネン博士による講演の企画・司会・討論者(英語)をした。グローバル化する社会におけるナショナリズムの在り方、ナショナリズムをめぐる理論について議論を行った。

学会発表 竹内里欧「フィンランドのナショナリズム研究者アイラ・ケミライネン 『参入』をめぐるディレンマ」第73回 関西社会学会大会、2022年5月28日

この学会発表では、「文明化」において周辺に位置するとされた地域における「文明化」された理想的人間像をめぐる現象について、比較の観点から検討した。また、彼女の研究におけるコーンの影響等、ナショナリズム研究における位置づけについて検討した。

本研究は、近代日本社会に焦点をあてたものであるが、「文明」を象徴する理想的人間像の形成と変容というテーマは、グローバルな文脈でも重要なトピックであり、これらは有意義であった。

(3) 家族像や子供像の通時的変容の分析に関連して

国際講演会発表 稲垣恭子、竹内里欧、濱貴子、佐々木基裕、花田史彦、椎名健人「現代日本の若者にとって『朝ドラ』とは何か? 質問紙調査及びインタビュー調査から」『越境する『朝ドラ』その過去・現在・未来』、越境的「晨間劇」: 晨間劇的過去, 現在與未來」、於中国文化大学、2019年3月23日

学会発表 稲垣恭子(研究代表)、竹内里欧、濱貴子、井上慧真、佐々木基裕、花田史彦、椎名健人「ポスト近代社会における『成長物語』 『連続テレビ小説』を手掛かりに」第71回日本教育社会学会大会、2019年9月12日

論文 竹内里欧、2019、「成長なき時代の『成長物語』 NHK『連続テレビ小説』にみる」『研究紀要 教育・社会・文化』第20号、1-17頁。

講演会における司会兼パネリスト(『朝ドラのウラ側と成長物語』講演会(NHK 放送文化研究所亀村朋子氏による講演)における司会兼パネリスト、2022年2月18日)

論文 竹内里欧、2022、「第18講 朝ドラ 主婦層を支えたビルドゥングスロマン」(『昭和史講義【戦後文化篇】(下)』筒井清忠編、2022、筑摩書房、311-28頁)

育児規範の通時的変化についての論文(執筆中)

これら ~ は、フィクションにおける家庭や子供の表象の変化の分析、あるいは、家庭にかんする規範や価値観の変容の分析であり、本研究テーマと関係があった。上記のほか、研究会報告も行った。

(4) その他

その他として、日本の教育文化について比較の視点から検討する共同研究会(日文研共同研究会「『日本型』教育文化を問い直す 新たな人間形成論をめざして」研究会、「日本型教育の文明的位相」研究会)などで、発表ののち報告書執筆(「テクノクラートの『知』の淵源: 『渡邊洪基 衆智を集むるを第一とす』(瀧井一博先生、2016年、ミネルヴァ書房)の書評」)を行った。また、「文と芸の社会学」研究会に参加・発表し、研究者からのフィードバックを得た。また、「Welcome to 社会学」(京都大学アジア親密圏/公共圏教育研究センター主催)の企画・運営にかかわり、社会学を中心とする研究者のネットワーク構築を行った。

以上の研究活動や研究成果をふまえ、現在、本研究を発展した研究を行っている。引き続き分析を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹内里欧	4. 巻 20
2. 論文標題 「成長なき時代の「成長物語」 NHK『連続テレビ小説』にみる」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『京都大学大学院教育学研究科 教育社会学講座 研究紀要 教育・社会・文化』	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹内里欧
2. 発表標題 フィンランドのナショナリズム研究者アイラ・ケミライネン 「参入」をめぐるディレンマ―
3. 学会等名 第73回 関西社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 (講演者は、NHK放送文化研究所亀村朋子氏、2022年2月18日、竹内は司会兼パネリスト)
2. 発表標題 「朝ドラのウラ側と成長物語」(講演者は、亀村朋子氏、竹内は司会兼パネリスト)
3. 学会等名 講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹内里欧
2. 発表標題 「「私民」の「市民」化 佐々木邦の諸作品から」
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 稲垣恭子、竹内里欧、濱貴子、井上慧真、佐々木基裕、花田史彦、椎名健人
2. 発表標題 「ポスト近代社会における「成長物語」 「連続テレビ小説」を手掛かりに 」
3. 学会等名 日本教育社会学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲垣恭子 竹内里欧、濱貴子、佐々木基裕、花田史彦、椎名健人
2. 発表標題 「現代日本の若者にとって「朝ドラ」とは何か? 質問紙調査及びインタビュー調査から 」
3. 学会等名 国際講演会「越境する「朝ドラ」 その過去・現在・未来 、越境的「晨間劇」：晨間劇的過去，現在與未來」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内里欧（討論者・司会として）
2. 発表標題 「How should we understand nationalism?」（ペッカ コルホネン先生による講演）に対する討論（英語）
3. 学会等名 国際講演会「Current Globalized Society and Nationalism」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内里欧（討論者として）
2. 発表標題 クリステン・スーラック博士による講演に対する討論
3. 学会等名 国際講演会「Making Tea, Making Japan」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 竹内里欧（第18講を単独で執筆。）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 筒井清忠編『昭和史講義【戦後文化篇】（下）』（竹内は、「第18講 朝ドラ 主婦層を支えたビルドゥングスロマン」の章（311-28頁）を執筆）	

1. 著者名 竹内里欧（原稿提出済み、2023年刊行を予定）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 未定	5. 総ページ数 -
3. 書名 高山敬太編『『日本型』教育支援モデルの可能性（仮）』（竹内は、「都市新中間層文化の生成と佐々木邦 『私民』の『市民』化の可能性」の章を執筆。提出済み。2023年刊行予定）	

1. 著者名 竹内里欧（第2章を単独で執筆。）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 『教職教養講座 第12巻 社会と教育』（「第2章 佐々木邦と『ユーモア小説』 都市新中間層のハビトゥスと『抵抗』戦術」の章を単独で執筆。）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------